Osaka University Knowledge Archive

Title	西村家所蔵資料中の一枚の集合写真について
Author(s)	竹田, 健二
Citation	懐徳堂研究. 2018, 9, p. 3-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71310
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

西村家所蔵資料中の一枚の集合写真について

竹田健二

はじめに

二〇一七年八月、筆者は湯浅邦弘教授（大阪大学大学院）、佐伯薫氏（一般財団法人懐徳堂記念会）と共に、種子島（鹿児島県西之表市）の西村貞則氏のお宅を訪問し、所蔵されている西村天囚関係資料の調査を行った。この調査は、西村家所蔵資料の概略を把握することを主な目的としたものであった[1]。

今回調査した西村家所蔵資料の中からは、多数の写真が収められている数冊のアルバムとは別になった、一枚の台紙付き集合写真が見つかった（写真1）。筆者はこれまでこの写真を見たことがなく、後に確認したところ、現在一般財団法人懐徳堂記念会にも、大阪大学の懐徳堂研究センターにも同じ写真は所蔵されていなかった[2]。

写真1　表面

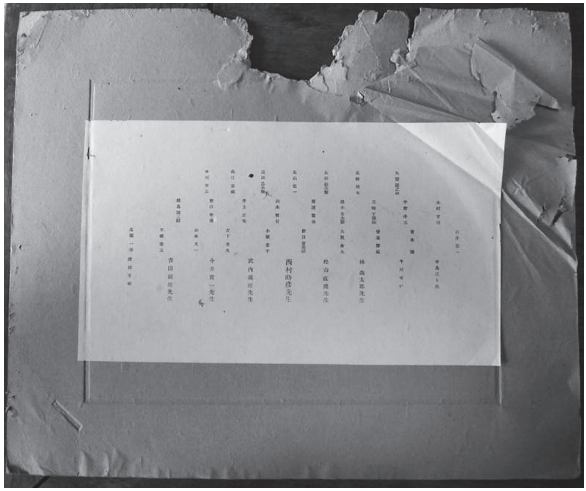

写真２　裏面

西村家に所蔵されていたこの集合写真の保存状態はあまり良くはない。台紙は表面の上端中央を中心に激しく破損しており、写真もまた上部の五分の一から四分の一程度が破損している。このため、人物群の背景となっている建物の形状がはっきりとは分からない。しかし、幸いなことに、人物が写っている部分に破損は及んでおらず、また背景の建物に「学」字の紋を染め抜いた幕が張りめぐらされていることが確認できる。この幕や写真全体の構図等から判断して、この写真はおそらく重建懐徳堂の講堂の前で撮影されたものと考えられる。

残念ながら、この写真及び台紙には、撮影された時期に関する情報がまったく記されていない。しかし、台紙の裏面に、集合写真に写っている人物全員の氏名を印刷して記した紙が貼付されている[3]（写真２）。このため、写真に写っている人物等を手がかりとして、この集合写真が撮影された時期を推測することが可能と思われる。

そこで以下では、この写真がいつ、何のために撮影されたものなのか、検討を加えることとする。

一　写真の中の人々

先ず、この写真に写っている人々について確認しておく。

この集合写真の前列中央には、洋装の西村天囚が座っており、そして天囚の向かって左に松山直蔵（重建懐徳堂教授）、その左に林森太郎（同講師・第三高等学校教授）が、また天囚の向かって右に武内義雄（重建懐徳堂講師）、その右に今井貫一（大阪府立図書館館長）、更にその右

に吉田鋭雄（後に重建懐徳堂講師・助教授・教授）が、それぞれフロックコートや紋付羽織袴等の正装で座っている。そして吉田の向かって右に男性が一人、林の向かって左に和装の女性が二人座り、他の人々は二列目に十名、三列目に九名、四列目に七名、和装と洋装とが混じってはいるがいずれも正装した姿で立って写っている。

台紙の裏面に貼付された紙を見ると、天囚・松山・林・武内・今井・吉田の六人については「先生」との敬称が付されて記されており、他の二十九人については氏名のみが記されている。

興味深いことに、台紙裏面の氏名の文字の大きさには三種類ある。すなわち、前列中央の「西村時彦先生」の文字が最も大きい。そして、その左右に座る他の五名の「先生」の氏名の文字はそれに較べてやや小さく、他の二十九人の氏名の文字は更に小さい。

天囚・松山・林・武内・今井・吉田の六人が「先生」とされていること、また前述の通り、写真の背景が「学」字の紋を染め抜いた幕を張りめぐらした重建懐徳堂の講堂であると考えられることからすると、六人の「先生」を除く二十九名の人々は、おそらく重建懐徳堂で学んでいた受講生と推測される。

このことは、二十九名のうちの十九名が大正十二年（一九二三）に発足した懐徳堂堂友会の会員であること、また懐徳堂堂友会の会員ではない十名の内の三名は大正十五年（一九二六）の時点で重建懐徳堂の定日講義をそれぞれ三年・四年・五年と継続して受講している者であり、また一名は素読科の修了者であること、従って、二十九名のうちの二十三名は重建懐徳堂の受講者であったことが確実であることから首肯できよう。[4]

以上のように、この写真には、重建懐徳堂の教師陣と受講生とが写っていると考えられる。なお、今井貫一は重建懐徳堂の教授や助教授、講師だったわけではないが、この点については後述する。[5]

写真の前列中央に天囚が座っていること、そして台紙裏面において天囚の名が最も大きな文字で記されていることから判断すると、この写真は明らかに天囚を中心として撮影されたものと見るべきであろう。すなわち、この写真は天囚にかかわる何らかの記念写真として、重建懐徳堂の前において、その教師陣と受講生とが天囚を囲んで撮影したものである可能性が高いと思われる。

二　武内義雄と今井貫一

それでは、この写真が撮影された時期はいつ頃と考え

られるのであろうか。撮影時期を推測する手がかりとして最も注目されるのは、重建懐徳堂で教えた時期が比較的短い、武内義雄がこの集合写真に写っている点である。

武内が重建懐徳堂の講師となったのは大正八年（一九一九）三月であり、武内はその後直ちに中国へと留学し、翌大正九年（一九二〇）十二月に帰国した。そして大正十二年（一九二三）三月、武内は大阪を離れて東北帝国大学中国哲学研究室に赴任した。従って、この写真の撮影時期は、武内が重建懐徳堂に着任した大正八年（一九一九）三月か、或いは中国留学から帰った大正九年（一九二〇）十二月から東北帝国大学に赴任した大正十二年（一九二三）三月までのいずれかの時点であったと推測される。

この写真が大正八年（一九一九）三月よりも前に撮影されたものではないということは、大正八年（一九一九）二月に重建懐徳堂講師を辞職した吉澤義則（京都帝国大学助教授）が写っておらず、吉澤の辞職に伴って講師となった林森太郎が写っていることから確認できよう。

次に注目されるのは、今井貫一である。先に触れたように、今井もこの写真では「先生」の一人とされているが、今井は重建懐徳堂の教授や助教授、講師だったわけではない。しかし、周知の通り、明治三十六年（一九〇三）に大阪府立図書館の館長に就任した今井は、明治四十二年（一九〇九）八月に活動を始めた大阪人文会の中心人物であった。このことは、大阪人文会の例会はそのほとんどが大阪府立図書館を会場に開催されたことからも窺えよう。そして、同会や懐徳堂記念会が中心となって展開した懐徳堂顕彰運動において、今井は天囚と共に活躍し、更に重建懐徳堂の建設にも尽力した。[6]

また、前述の武内は、重建懐徳堂の講師となるまで、今井が館長を務める大阪府立図書館に勤務しており、更に武内は今井の紹介によって天囚の知遇を得て、景社に参加していた。[7]

このため、この写真が重建懐徳堂の講堂前で撮影された、天囚にかかわる何らかの記念写真だとするならば、天囚、重建懐徳堂、そして武内と非常に関わりの深い今井が一緒に写っており、そして重建懐徳堂関係者から「先生」と呼ばれていたとしても、何ら不思議ではないと思われる。

三　吉田鋭雄

更に注目されるのは、この写真に、吉田鋭雄が「先生」として写っている点である。

吉田は重建懐徳堂の最後の教授となった人物だが、重建懐徳堂の講師になったのは大正十二年（一九二三）十一月である。吉田が「先生」であるということの意味が、もしも講師であることを指すのであれば、この写真は大正十二年（一九二三）十一月以降に撮影されたものということになる。しかし、先述の通り、武内は同年四月に既に東北帝国大学に赴任しており、そして武内の後任として同年四月に財津愛象（大阪高等学校教授）が重建懐徳堂の助教授に就任し、また稲束猛も講師に就任している。財津と稲束とがこの集合写真に写っていないことから、この写真が大正十二年（一九二三）十一月以降に撮影されたものではないということは確実と考えられる。

重建懐徳堂には、実は教授・助教授・講師以外にも「先生」がいた。それは、大正六年（一九一七）に設けられた素読科の「教師」である。素読科が設立された時にその「教師」を勤めたのは波多野七蔵であったが、波多野は大正九年（一九二〇）二月に辞職し、代わって吉田が素読科の「教師」となった[8]。このため、この集合写真において吉田が「先生」とされているのは、重建懐徳堂の素読科の教師であることを意味したと考えられる。

以上のことから、この写真は、吉田が素読科の教師となった後に撮影されたものであり、しかも前述の通り、武内が重建懐徳堂に勤めていた間に撮影されたものであると考えられる。すなわち、武内が中国留学から帰国した大正九年（一九二〇）十二月から、武内が大阪を離れる大正十二年（一九二三）三月までの、二年四ヶ月の間にこの写真が撮影された可能性が高いと考えられるのである。

四　撮影の目的

この集合写真が大正九年（一九二〇）十二月から大正十二年（一九二三）三月までの間に撮影されたとするならば、その間に起きた、重建懐徳堂の教師陣とその受講生とが一同に会して記念するに値する、西村天囚にかかわる特別な出来事とは一体何だったのであろうか。

最も蓋然性が高いのは、大正十年（一九二一）八月に天囚が宮内省御用掛に任命され、同年十月三日に大阪を離れて東京に移り住んだことと考えられる[9]。すなわち、この集合写真は、天囚が大阪を離れる直前、おそらくは同年九月に重建懐徳堂前で撮影されて天囚に贈られた、送別の記念写真であったと推測される。

管見の限りでは、大正十五年に刊行された『懐徳堂要覧』や、昭和十一年に刊行された『懐徳堂沿革』等、財

団法人懐徳堂記念会がまとめた資料には、そもそも天囚の上京について言及がなく、こうした写真の撮影についても記述はない。このため、この写真の撮影は、財団法人懐徳堂記念会の正式な行事として行われたものではなく、有志により企画されて実現したものであった可能性が高いと思われる。現在、同じ写真が一般財団法人懐徳堂記念会に保存されていないのは、おそらくはそのためであろう。

おわりに

この集合写真が撮影されたおよそ三年後、大正十三年（一九二四）七月二十九日に天囚は東京で亡くなった。天囚は大阪で過ごした約三十年の中の最後の十年余りを懐徳堂顕彰運動の推進に尽力した。天囚にとって、重建懐徳堂とその教師陣、そして受講生との別れには、特別な思いがあったと思われる。重建懐徳堂の人々にとっても、天囚との別れは辛いものであったに違いない。そうした思いのこもったこの集合写真が、天囚の故郷・種子島の西村家に保存されていたことは、大変幸いなことであった。

注

（1）調査の概要については、『懐徳』第八六号（二〇一八年一月）所収の、湯浅邦弘・佐伯薫・筆者の報告「西村天囚関係資料調査報告―種子島西村家訪問記―」を参照されたい。

（2）佐伯薫氏、及び大阪大学懐徳堂研究センターの佐野大介氏の御教示による。

（3）写真裏面の人物名は、写真を表から見た時の位置関係ではなく、表から見た時の人物の背中にあたる位置に印刷されている。

（4）『懐徳』第一号（懐徳堂堂友会、大正十三年〔一九二四〕）所収の「堂友會々員名表」、及び『懐徳堂要覧』（財団法人懐徳堂記念会、大正十五年〔一九二六〕）の「三年以上聴講繼續者及素讀修了者」・「附録　懐徳堂堂友會」参照。

（5）重建懐徳堂には、「職制」として、教授一名、助教授若干名、書記若干名、司書若干名が職員として置かれ、また「講義ヲ分擔スル爲メ講師ヲ置クコト」ができるとされていた。天囚も大正六年（一九一七）一月から亡くなるまで、講師の一人であった。注（4）前掲の『懐徳堂要覧』参照。

（6）拙著『市民大学の誕生―大坂学問所懐徳堂の再興―』（大阪大学出版会、二〇一〇年）参照。大阪人文会の第五次例会は、大阪府立図書館ではなく、網島の料亭・鮒宇楼で開催された。このことについては、拙稿「中井木菟麻呂が受け継いだ懐徳

堂の遺書遺物―小笠原家に預けられたものを中心に―」（『中国研究集刊』第六三号、二〇一七年六月）参照。なお、今井は財団法人懐徳堂記念会の常任理事であっただけでなく、懐徳堂堂友会が設立された際、永田仁助（財団法人懐徳堂記念会理事長）・小倉正恒（同理事）・坂仲輔（同）・上野精一（同）・西村時彦（同）・狩野直喜（重建懐徳堂顧問）・内藤虎次郎（同）・武内義雄・稲束猛・財津愛象・林森太郎・中井木菟麿と共に堂友会の名誉会員となった。注（4）前掲の「堂友會々員名表」参照。

（7）景社は、参加者が持ち寄った漢文にお互いが筆削を加える会合であった。「碩園先生の遺訓」（『懐徳』第二号碩園先生追悼録〔懐徳堂堂友会、一九二五年〕所収。後に『武内義雄全集』第十巻〔角川書店・昭和五十四年〕所収）参照。

（8）『懐徳堂沿革』（財団法人懐徳堂記念会、昭和十一年〔一九三六〕）参照。

（9）天囚が上京した時期については、後醍院良正『西村天囚伝』（朝日新聞社社史編集室、一九六七年）参照。大正十年（一九二一）十月四日付の大阪朝日新聞（夕刊）は、「西村天囚博士　愈今朝東上」との見出しで、天囚の上京を報じる写真入りの記事を掲載している。